



神戸市北区丹生山明要寺跡・神戸市中央区滝山城址 遺構の分布調査

河野, 未央

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 3(平成16年度事業報告書):77-79

(Issue Date)

2005-03-31

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002207>



神戸市北区丹生山明要寺跡・神戸市中央区滝山城址遺構の 分布調査

神戸大学大学院文化科学研究科院生 河野未央

(1) はじめに

昨年度の住吉川流域における水車小屋の分布調査に引き続き、地域連携センターでは本年も神戸市教育委員会文化財課の調査事業に協力した。当該事業の経緯に関しては昨年度報告書を参照いただきたい。

昨年度同様、地域連携センターでは、研究員や専門的知識をもつ院生を調査補助員（アルバイト）として派遣した。担当者は浅利文子・兒玉州平・崔莉娜・村山敏男・山本陽一郎（以上、神戸大学大学院文学研究科）・近藤浩二（尼崎市立地域研究史料館嘱託）・山田徹（京都大学文学研究科）・河野未央（神戸大学大学院文化科学研究科）の八名である。本年度は神戸市北区丹生山明要寺跡と神戸市中央区滝山城跡の遺構について、分布調査を行った。なお当初は神戸市北区淡河城の付城についても調査を予定していたが、日程的な問題もあってこちらについては実施できなかった。

(2) 神戸市北区丹生明要寺跡

i 丹生山明要寺について

北区山田町の北側に位置する丹生山（標高514.8m）は、隣国播磨国の淡河の地に通じる交通の要所である。かつてその山頂には明要寺があった。明要寺は欽明天皇の時代に百済から渡来した百済聖明王の王子、童男行者創建と伝えられる。

平安時代末期には、平清盛が福原に遷都するにあたり、当地を京都の比叡山になぞらえて当寺を復興、壮大な伽藍を建立すると同時に日吉山王権現を祀ったといわれている。戦国時代には大幅に改変されて山城として利用されたと考えられている。しかし、同寺院は明治二年（一八六九）の廃仏毀釈で廃絶しており、現在山頂には鎮守社であった丹生神社のみが残る。



明要寺に関して伝える文献史料は少なく、文龜年間（一五〇一～〇四）に製作されたと考えられる「紙本著色丹生山明要寺参詣曼荼羅図」（丹生神社所蔵、以下「参詣曼荼羅図」）がほぼ唯一その詳細をうかがえる史料である。この「参詣曼荼羅図」では、明要寺は多くの寺坊が軒を連ねる大

規模な山岳寺院であったことがうかがえる。しかし、考古学的な調査は殆ど行われておらず、丹生神社のある山頂付近以外は、その実態（特に寺坊の実際の位置関係等）は必ずしも明らかになっているとはいえない。

文化財保護の観点からすれば、少なくとも寺域の確定は不可欠である。今回の調査ではこのような現状をふまえ、さしあたって寺域のおおよその範囲を地図上で示すことができるよう、かつて建造物があったと考えられる「平場」を中心に調査を実施した。

ii 調査の概要

現地での調査は平成一七年二月二三・二四・二八日、三月一・二・七・一〇・一一日の計八日間にわたって実施した。（三月四日も調査予定日であったが、当日は天候不良のため市教委へ提出する調査報告書の中間的なまとめを行なった）

今回は、①丹生神社のある山頂、②山頂付近の小屋（防火用水池？）の周辺、③脇参道・本参道沿いにある平場を中心に調査を進めた。その結果、当初予想していたよりも多くの平場を発見することができた。特に②の地点において石段を発見できたことは大きな成果であろう。この石段は、「参詣曼荼羅図」の中央部に描かれた石段であると考えられる。これにより、石段の両脇に描かれている「僧坊」・「大日堂」・「不動堂」についても推測ながら現地比定を行なうことができた。



また、①・②でこれまで確認されていなかった数多くの石垣を発見することができたほか、③では塹壕らしき跡や、門が設けられていたと考えられる場所も確認された。また、今回①～③で確認

した平場下の斜面等から、土師器・瓦の欠片等の遺物が多数発見された。それらはほぼ全て地表もしくは地表付近で確認されたものである。なお、発見した遺物については一部採取した。

三月一六日・二二日の二日間で神戸市教育委員会へ提出する調査報告書をまとめた。それぞれの平場で記録した調査票の図面を整理し、清書した。また今回の調査で確認できた平場を地図上に落としたほか、各平場で撮影した写真を整理した。

（3）神戸市中央区滝山城跡

i 滝山城について

滝山城跡は通称城山（標高232m）と呼ばれる急峻な山の二つの尾根上にある。東は生田川の布引谷、西は北野谷という深い谷にはさまれ、頂上からは大阪湾を一望できる。滝川城はこのような地の利を活かしたまさに自然の要害であったといえる。

滝山城については築城年代・築城者とも不明である。しかし史料上の所見は元弘三年（一三三三）まで遡り、少なくとも鎌倉時代末には存在していたものと考えられる。南北朝の動乱期以降になると滝山城は激しい戦火の舞台となった。城主も赤松氏から松永久秀、篠原長房と次々に交代している。永禄一一年（一五六八）に篠原長房は織田信長に攻められ、滝山城から逃亡、滝山城は摂津守護となった荒木村重の領有するところとなった。しかし天正七年（一五七九）一一月、再び信長に落とされ、滝山城は以降廃城となった。

なお、滝山城については、一九八二年に兵庫県教育委員会によって報告がまとめられており、発掘調査も数箇所行なわれている。今回の調査はそのような報告をもとに平場一箇所ずつの広さなどをさらに詳しく調べるとともに、遺構の現状（残存状況等）を確認した。

ii 調査の概要

現地での調査は、平成十七年三月十四・十五日の二日間で実施した。

一日目は、城山の麓から頂上まで、登山道に沿って歩き、平場を確認しながら、それらの広さや場所などを記録した。結果、計二四の平場を調査することができた。頂上入り口付近から頂上までの道沿いに、石垣の残りを伴う比較的大きな

平場を数多く確認したほか、本丸にあたる頂上への入り口付近で土塁と堀切を確認した。二日目は、頂上付近の平場などを含めて新たに計二十の平場を記録した。なお、頂上付近にある平場においてが時期は不明であるが、瓦を一点採取した。

さらに三月一六日・二二日の二日間で神戸市教育委員会へ提出する調査報告書をまとめた。それぞれの平場で記録した調査票の図面を整理し、清書した。また今回の調査で確認できた平場を地図上に落とししたほか、各平場で撮影した写真を整理した。

今回は、計測も含め、平場一箇所ごとにより詳細に調査することができた。その結果、石垣を伴う平場を確認するなど、当時の山城の機能を考える上で重要な遺構を把握できた。

(4) おわりに

明要寺跡遺構・滝山城跡遺構とも、今回の調査の成果は本年度の神戸市埋蔵文化財分布図（神戸市教育委員会文化財課作成）に反映される予定である。今回の調査で新たに発見した事実は多い。今回の調査を契機として今後本格的な発掘調査が実施され、両遺構に関する学術研究が進展することを期待するとともに、両遺構の保存・保護に寄与することを願う。

【主な参考文献】

浅岡俊夫「六甲山周辺の山岳寺院（兵庫県）」
（『仏教美術』二六五、毎日新聞社、二〇〇二）
神戸市教育委員会『平成一〇年度指定 神戸市文化財調査報告書』（二〇〇〇）
兵庫県教育委員会『兵庫県の中世城館・荘園遺跡—兵庫県中世城館・荘園遺跡緊急調査報告』（一九八二）